

神経認知障害をもつ高齢患者への情動活性化を目的とする心理劇的方法：重症度に応じた技法上の工夫と有用性に関する研究

北野，祥子

<https://hdl.handle.net/2324/1654612>

出版情報：九州大学，2015，博士（心理学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏名	北野 祥子			
論文名	神経認知障害をもつ高齢患者への情動活性化を目的とする心理劇的方法 -重症度に応じた技法上の工夫と有用性に関する研究 -			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	吉良安之
	副査	九州大学	教授	黒木俊秀
	副査	九州大学	准教授	古賀 聡
	副査	九州大学	教授	大場信恵

論文審査の結果の要旨

本論文は、神経認知障害をもつ高齢患者への情動活性化を目的とした心理劇的方法について、重症度に応じた技法上の工夫について検討し、その有用性について論じたものである。第1章では従来の研究を概観し、研究課題として、神経認知障害の重症度に応じた技法上の工夫とその効果の検討、および評価の方法についての検討を示している。第2章では、軽度～中等度の神経認知障害の高齢患者への対人交流をねらいとした心理劇的方法導入グループの事例を取り上げ、行為表現やグループへの導入の工夫や留意点について検討している。第3章では、中等度神経認知障害の高齢患者へ心理劇的方法を導入し、患者が関心をもち自発性や情動を活性化できるようなテーマ設定や劇展開の工夫について検討している。第4章では、高度神経認知障害高齢患者へ心理劇的方法を導入し、高度神経認知障害患者が関心を持ち、情動を活性化できるような劇展開の工夫について検討している。第2章～第4章に示した各グループ事例では、従来は二件法であった東大式観察評価スケールの評価基準を詳細にして独自の基準を設定し七件法で評価することにより、セッションの進行に伴う各患者の変化を詳細に検討するとともに、演者体験と観客体験との比較検討を行っている。以上の結果を踏まえ、第5章の総合考察では、重症度に応じた心理劇的方法の技法上の工夫と、本方法によって得られた効果を検討している。第1に、重症度によって心理劇的方法の第Ⅰ相ウォーミングアップ、第Ⅱ相劇化、第Ⅲ相シェアリングのそれぞれにおいて技法上の工夫が必要であること、第2に、重症度によって症状や対人面での課題があり、言語・行為・イメージなど残存している機能を媒介にすることで対人交流や情動の変化が生じることを明らかにしている。そして、神経認知障害高齢患者に対して心理劇的方法を用いることの意義として、“表現へと繋がる主体性の支持”と“表象活動の賦活化”の2点を挙げている。

以上のように、本研究は、軽度のみならず中等度および高度の神経認知障害をもつ高齢患者を対象として、心理劇的方法を実践して成果を挙げるとともに、観察評価スケールの評価基準の工夫により、患者各人に生じる効果を詳細に検討し、本心理劇的方法の臨床的有用性を明らかにした点で、臨床心理学における意義深い成果を挙げた。

よって、本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。

本論文について口頭による試験を行い、心理劇研究上の本方法の位置づけ、臨床実践上の独自性、研究方法、今後の展開などについて質疑を行った結果、いずれも十分な回答を得たので、最終試験に合格したものと認める。